

令和3年3月24日(水)

多くの出来事があった令和2年度の終業日を、本日、ここに迎えることとなり、様々に思い起こしているのは私だけではないと存じます。生徒の皆さんにとって残念だったことが多くあり、その思いに耐えて頂くほかなかった私たちにとっても、やるせない1年間でありました。とりわけ、2年生の皆さんに修学旅行の中止を命じたことは、校長として、無念でなりません。ですが、多くの人々が辛い出来事に耐え、力を合わせて元の生活を取り戻そうと励んでいることを思い、私たちの義務を誠実に果たす決意を、ここで改めて共有しましょう。

さて、私たちを苦しめる出来事として、しばしば取り上げられるのが自然災害であります。今年の3月11日は、東日本大震災から10年の節目となる日でした。犠牲になった方々の御冥福と、未だ途上にある被災地の復興を心からお祈りいたします。改めてあの時期を振り返るとき、私は、弟から聞いたある話を思い出します。

私の弟は、現在勤務する東京本社から、石巻の系列会社に出向しておりました。港に隣接するその会社では、地震の際の避難マニュアルが整備されており、定期的に訓練していたとおりに、あの日、社員は会社のバスで退避したそうです。弟は現場幹部の一人として、社員の全員退避を確認したのち、社長室へその報告に行きました。報告を受けた社長は弟に、車で社員のバスに同行するように命令し、副社長とともに、自分は会社の建物に残ると言いました。頑丈な鉄筋4階建て相当の社屋で、津波に耐えられる設計であることは信じられても、保証はありません。弟が理由を尋ねると、「私には見届け、記録する責任がある。どのように津波が押し寄せ、どんな経緯で会社の財産が失われたのか、動画を撮影して残すため、ここに残る。」と言ったそうです。結果的に会社の建物は揺るぎもせず、多くの資材を流されたものの、中枢となる事務室とともに、社長、副社長は無事でした。この時に社長が撮影したすさまじい津波の動画は、授業での活用を前提に提供していただき、繰り返し見直しています。

弟からこの話を聞いたとき、無謀だと批判することは簡単でした。しかし、この社長が自らの任務を全うしようとする気概に、私は強く感情を動かされました。誤解の無いように申し上げますが、命を危険にさらす行為を称賛するものではありません。極限状態のもと、自分を飾るためでなく、計算ずくでもなく、これほどまでに人は自らの責務に忠実になれるものなのか、私にもその真似ができればどうかと、今でも時々、考え込むことがあるのです。

この時の社長と同じく、今まさに医療に携わる方々は、御自身の社会における責任を果たしたい一念に動かされ、コロナウイルスと闘っておられるのだと思います。それを思うとき、私たちは軽率な行動などとれるでしょうか。明日からの春休み、緊急事態宣言解除に浮かれることなく、身を引き締めた生活を送ってくださることを望みます。4月には、新2年生、新3年生として、元気な姿を見せてください。終わります。